

高村峰生 著

▶触れることのモダニティ

ロレンス、スティューグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ
2・27刊 A5判318頁 本体3200円
以文社

「我に触れるな」の禁令に対峙する、 美的現代性の桎梏

視覚性から触覚性への転回へ

稲賀繁美



ノリ・メ・タンゲレ「我に触れるな」とは、復活したイエスが、その体に触れようとしたマツダラのマリヤに対して発した言葉として知られる。この文句を何度が作品に引用しているD.H.ロレンスは、フィレンツェ近郊の丘陵、フィエーソッレに滞在し、最晩年に『エトルリアの故地』(1927)を残す。ムッソリーニが「握手の衛生的」との理由で導入したローマ式敬礼は、実際にはフランス新古典派の画家ダヴィッドの《ホラティウス三兄弟の誓い》に由来し、ダヌンチオ脚本の叙事詩映画《カピリア》(1914)などで普及したという。ロレンスはこのファシスト党の「接触忌避」とは対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテラコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画にも見出す。画家の「リンゴ性」aplennesの追求は当時の通念から「不潔」で「不道德」との批判を招く。そうした「潔癖さ」の触覚忌避に潜む「偽り」を訴

えるのが、noli me tangereの禁令を破ろうとするロレンスの生命の「倫理」だった。手仕事 Handwerkの残す痕跡は触覚と無縁でないが、ヴァルター・ベンヤミンにとって、経験の伝達には触れることと Mangeln 共存する。そのベンヤミンは写真や映画といった複製藝術が作り手の「手を開放した」一方で、ダズンヌムや映画に代表されるメディアは作品を鑑賞者に接近させる限りで「触覚的」[taktilisch]と呼ぶ。ただしこの語は通常「戦術的」の意味。そう主張する著者は、ベンヤミンへのアロイス・リゲルやルートヴィヒ・クラウゲスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型 Urbild へと現象するとするクラウゲスの説を、故郷への憧憬が詩の韻により触知的に体験されることとみるベンヤミンの議論に重ね合わせる。日本でいへば折口信夫の「憧憬」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源 Ursprung に触れる

まじ。『純粋言語』とは根源

「根源への志向は生成と消滅から発生する」と説くベンヤミンの翻訳論には、私見ではカバラーの下地を無視できないのか、否か。

このイメージ Bild はあたかも唯識が説く瀑布に落ちる水流を思わせる。滝の水音は永遠に更新される瞬時だが、それは翻訳の営みにおいて「アウラの風に触れて鳴るから」。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）

「触れるな」とは、復活したイエスが、その体に触れようとしたマツダラのマリヤに対して発した言葉として知られる。この文句を何度が作品に引用しているD.H.ロレンスは、フィレンツェ近郊の丘陵、フィエーソッレに滞在し、最晩年に『エトルリアの故地』(1927)を残す。ムッソリーニが「握手の衛生的」との理由で導入したローマ式敬礼は、実際にはフランス新古典派の画家ダヴィッドの《ホラティウス三兄弟の誓い》に由来し、ダヌンチオ脚本の叙事詩映画《カピリア》(1914)などで普及したという。ロレンスはこのファシスト党の「接触忌避」とは対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテラコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画にも見出す。画家の「リンゴ性」aplennesの追求は当時の通念から「不潔」で「不道德」との批判を招く。そうした「潔癖さ」の触覚忌避に潜む「偽り」を訴えるのが、noli me tangereの禁令を破ろうとするロレンスの生命の「倫理」だった。手仕事 Handwerkの残す痕跡は触覚と無縁でないが、ヴァルター・ベンヤミンにとって、経験の伝達には触れることと Mangeln 共存する。そのベンヤミンは写真や映画といった複製藝術が作り手の「手を開放した」一方で、ダズンヌムや映画に代表されるメディアは作品を鑑賞者に接近させる限りで「触覚的」[taktilisch]と呼ぶ。ただしこの語は通常「戦術的」の意味。そう主張する著者は、ベンヤミンへのアロイス・リゲルやルートヴィヒ・クラウゲスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型 Urbild へと現象するとするクラウゲスの説を、故郷への憧憬が詩の韻により触知的に体験されることとみるベンヤミンの議論に重ね合わせる。日本でいへば折口信夫の「憧憬」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源 Ursprung に触れる

「触れるな」とは、復活したイエスが、その体に触れようとしたマツダラのマリヤに対して発した言葉として知られる。この文句を何度が作品に引用しているD.H.ロレンスは、フィレンツェ近郊の丘陵、フィエーソッレに滞在し、最晩年に『エトルリアの故地』(1927)を残す。ムッソリーニが「握手の衛生的」との理由で導入したローマ式敬礼は、実際にはフランス新古典派の画家ダヴィッドの《ホラティウス三兄弟の誓い》に由来し、ダヌンチオ脚本の叙事詩映画《カピリア》(1914)などで普及したという。ロレンスはこのファシスト党の「接触忌避」とは対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテラコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画にも見出す。画家の「リンゴ性」aplennesの追求は当時の通念から「不潔」で「不道德」との批判を招く。そうした「潔癖さ」の触覚忌避に潜む「偽り」を訴えるのが、noli me tangereの禁令を破ろうとするロレンスの生命の「倫理」だった。手仕事 Handwerkの残す痕跡は触覚と無縁でないが、ヴァルター・ベンヤミンにとって、経験の伝達には触れることと Mangeln 共存する。そのベンヤミンは写真や映画といった複製藝術が作り手の「手を開放した」一方で、ダズンヌムや映画に代表されるメディアは作品を鑑賞者に接近させる限りで「触覚的」[taktilisch]と呼ぶ。ただしこの語は通常「戦術的」の意味。そう主張する著者は、ベンヤミンへのアロイス・リゲルやルートヴィヒ・クラウゲスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型 Urbild へと現象するとするクラウゲスの説を、故郷への憧憬が詩の韻により触知的に体験されることとみるベンヤミンの議論に重ね合わせる。日本でいへば折口信夫の「憧憬」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源 Ursprung に触れる

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）